

# 大津 歴博 だより

企画展

2002  
No.47

## 商売繁盛 広告博覧会

—北原照久コレクション—

7月27日(土)～9月1日(日)



赤玉ポートワインポスター（大正11年）



大津市歴史博物館

# 商売繁盛 広告博覧会

## 北原照久コレクション

広告は、時代を映し出す鏡です。

人々の関心をひきつけるために、広告には人物の服装やキャッチコピーなどに当時の流行や世相が積極的に取り入れられ、時には自らが流行を作り出していくこともありました。また、商売繁盛を象徴するキャラクターや企業が作り出したマスコットは、その時代を代表するキャラクターとして、私たちにその頃を思い起こさせてくれます。

本展では、ブリキのおもちゃを中心に、多彩な近代資料のコレクターとして知られる北原照久氏のコレクションから、近代以降の広告を中心に、様々な広告や商業意匠、約五〇〇点を展示。広告から当時の世相や風俗の移り変わりを紹介します。また、期間中は、「街かどの広告展」と称して、博物館周辺の展示施設や商店等では、天津市内の広告に関する資料を展示。近代大津の広告や商業活動の状況を、街並みを散策しながら楽しんでいただけます。

### ● 広告博覧会の展示構成

#### ○ 繁盛を呼ぶキャラクター

福助、招き猫などの繁盛を呼ぶキャラクターや、昭和三〇年代を中心に企業が制作したキャラクターなどが大集合。現役から、今は見かけなくなってしまったものまで、登場の歴史を紹介します。



プラトン万年筆ポスター

### ○ 広告は時代を映す鏡

広告の花形である、引札やポスター。そこには、流行・風俗や当時の世相などが織り込まれています。ここでは、これらから読み取れるデザインの流行、制作した企業・商品の歴史など、さまざまな角度から、解説していきます。



引札

シチズンCちゃん店頭用人形



### ○広告百面相

街を賑わした広告類を紹介。駄瑯看板や木製看板・POP<sup>ポップ</sup>広告などの懐かしい広告から、ちよつと変わった珍品まで、街のあちこちに配置されていた広告を紹介します。

### ●街かどの広告展

展覧会期間中、JR大津駅～歴史博物館一帯が、広告画像一色に染まります。いっつく悠館<sup>ゆうかん</sup>・町のオアシスなどの施設では、大津で制作された引札やポスターなどを展示。一帯の各商店でも秘蔵の広告資料を展示していただきます。

展示期間・各施設の休館日、詳しい内容については、博物館ホームページか、博物館までお問い合わせください。

### ●観覧料

- 一般 六〇〇円(四八〇円)
- 高・大生 五〇〇円(四〇〇円)
- 小・中生 四〇〇円(三二〇円)

※(一)内は、団体(二五名以上)、前売、市内在住の六五歳以上の方・障害者の方の割引料金

### ●休館日 月曜日

森永ミルクキャラメルディスプレイ



### タイムスリップ

つくろろう! あそぼう!

江戸時代のおもちゃ

夏休み期間中に、子ども達を対象とした江戸時代の玩具<sup>がえ</sup>の制作と作品の展示を行ないます。

制作する玩具は、江戸時代の子ども達が遊んでいたからくり玩具をベースにしたものです。今回の企画は、成安造形大学との共同企画によって開催するもので、制作玩具の選定・指導についても、すべて学生達が行ないます。ですから、制作する玩具も、江戸時代そのままではなく、今の子ども達が親しめるように手を加えたもので、創造を加えられるようにも考えられています。

また、制作期間終了後は、当館の企画展示室で、子ども達の制作した玩具を展示。制作の元となった江戸時代の復元玩具や学生達が制作したオリジナル玩具と共に、その成果をご覧いただけます。

### ■ワークショップ(玩具制作)

八月六日(火)～八月二一日(日)

### ■作品展示期間

八月一三日(火)～八月二五日(日)

## 第26回ミニ企画展

### 近代大津の引札

■ 7月16日(火)～9月8日(日)



和洋地金・諸金物商の引札 (田中滝三氏寄贈)



呉服太物商の引札 (嶋田玉城氏蔵)

明治時代から昭和(戦前)の頃まで、商店では、引札(ひきふだ)と呼ばれる色刷りの宣伝チラシが制作され、得意先などに配られていました。図柄は、恵比寿・大黒や宝船など縁起の良いものが主流ですが、なかには、ロシアの兵隊をやっつける日本兵が描かれたものがあります。これなどは、明治三十七年(一九〇四)に勃発した日露戦争を意識したものでしょうし、また自動車や機関車など、近代の幕開けを示す図柄もあり、まさに引札は、時代を映す鏡ともいえるでしょう。本展では、それらさまざまな図柄の引札をたっぷり紹介します。

## 第27回ミニ企画展

### 大津絵

■ 9月10日(火)～11月10日(日)



大津絵 猫と鼠 (江戸時代)

人の世の教訓を説く一方で、生真面目になりすぎず、ユーモラスにあふれた描きぶりでも多くのファンを持つ大津絵。その屈託のない、自由奔放な筆遣いからは、江戸時代の人々の気質が素のまままで伝わってきます。本展では、初期大津絵の神仏物から中期の世俗物、そして後期の道歌入り大津絵は無論、近代日本画家による個性に富んだ大津絵作品も含め、収蔵品を一堂に展示。大津絵にあふれる、民画の魅力を振り返ります。なお、本展は、前期(10/14)と後期(10/16)の2期展示となり、展示の絵入れ替えを行います。

# 収蔵品紹介

40

## 左官仲間定書 一冊

小川正家蔵 本館保管  
寛永十二年(一六三五)

江戸時代の大津は、経済都市として栄えていた。その中核となったのが、商人や職人の株仲間(同業組合)で、その数は明和年間(一七六四

〜七二)には三八業種を数えていたと伝えられています。江戸幕府は、商工業の統制のために、これらの仲間に「株」を与えて公認し、運上・冥加といった税を納めさせる替わりに、これら仲間の独占的営業を保証していたのです。

ここに紹介するのは、その大津町の職人仲間の資料で、旧鍛冶屋町で左官業を営んでいた伊勢屋長兵衛家(小川家)に伝来した古文書です。

さて、この仲間定書は、縦二六・五cm、横一九・五cmの冊子一冊(六丁)で、内容は、勘四郎ら四人の者が仕事の日当等について協定を結び、違反者は罰金を仲間に支払うことを取り決めたものです。まず、「日さくりう(作料日当)」は銀一匁五分より安く請け負わないと決め、違反者は「くわいたい(過怠罰金)」として銭五百文を支払うこととされています。また仲間では、その結束をはかるため、交代で「汁講(会食の寄合)」を催していましたが、その食事は一汁一菜と決め、

それより「けっこう(結構費沢)」な食事を出した場合も、過怠(罰金)として銭二百文を支払うと決めていました。

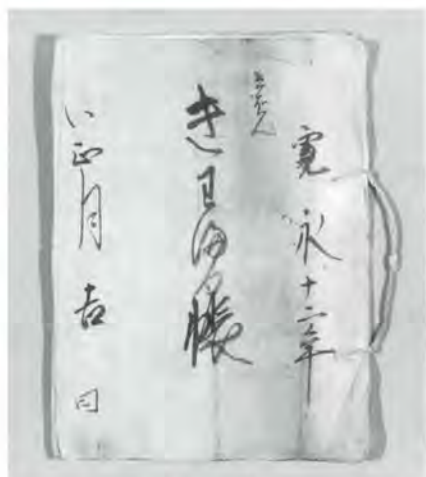
この定書には、仲間の業種の記載はありませんが、文化十一年(一八一四)七月付けの「左官仲間永代定目帖」等と共に伝来していることから、左官仲間の定書と考えてよいでしょう。

これまで、大津町の左官仲間については、元禄年間(一六八八〜一七〇四)に、六人の仲間が公認され、大津代官所の牢屋敷普請の際は無料で壁塗りを奉仕していたこと(「淡海録」)しか知られ

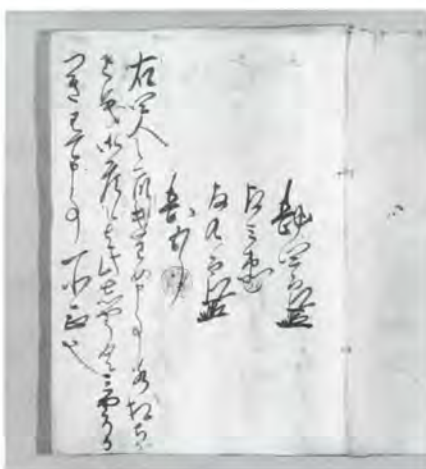
ていませんでしたが、この小川家文書により、幕府公認の有無は不明ながら、仲間の成立が寛永十二年(一六三五)にさかのぼること、文化十一年(一八一四)には、一四の仲間株があり、東西左官仲間と称していたことが判明しました。

大津町の商人・職人仲間で、その成立が江戸時代初期にさかのぼることを証明する同時代資料は、これまでほとんど見つかりません。その意味でも本文書はたいへん貴重なものといえましょう。

(中森 洋)



表紙



第1丁表

琵琶湖疏水は、明治維新による東京遷都でさびれた京都を復興させるため実施された一大土木事業であった。琵琶湖の水を、発電や灌漑に利用するとともに、物資運搬にも活用するため、大津三保ヶ崎から京都蹴上まで（さらに伏見まで）水路を開削したもので、明治十八年（一八八五）に着工、同二十三年に完成。工事責任者は工部大学校（現東京大学）出身の若き技術者・田辺朝郎であった。

本年四月、市民の方々を案内して、この疏水を大津から京都まで歩く機会があった。その際に調査したことがらのなかで、一般の疏水解説書には掲載されていない話題を、ここで紹介してみよう。当日は、三保ヶ崎から疏水の水路閣が残る南禅寺まで、約九キロメートルを歩いた。水路の大津―京都間には三カ所のトンネルが設けられ、各トンネルの石造の出入り口六箇所には、明治政府の閣僚などが揮毫した石板が掲げられている。たとえば第一トンネル東口には伊藤博文筆の「氣象萬千」、同西口には山県有朋筆の「廓其有容」が掲げられている。石板に刻まれた文字をよく見ると、水が入っていく東口の文字は陰刻され（文字がへこんでいる）、西口、つまり水が出て行く方の文

字は陽刻（文字が出っ張っている）されている。これは、残り二本のトンネルの四箇所の石板の文字についても同様である。水の流れる方向によって、文字の凹凸に工夫がなされているのは素晴らしいアイデアという他ない。そのほかにも、このトンネルにはちよっとしたデザイン上の工夫が凝らされている。

トンネルの石造洞門は、一番大津寄り（第一トンネル東口）と二番京都寄り（第三トンネル西口）の洞門の形が同一であり、さらに、第一トンネルの西口と第二トンネルの東口、第二トンネル西口と第三トンネル東口、つまり向かい合っている洞門どおしが共通の要素をもった形をしているのである。また大津側の取水口近くに架かる鹿関橋は、擬宝珠の付いた風格ある石橋だが、蹴上の出口にも、これと同様に擬宝珠の付いた石橋が架設されている。

疏水は、言うまでもなく京都に近代化をもたらせた施設として注目すべきものだが、建築構造上に見る全体計画も、かなり隅々まで綿密に配慮されたものであることがうかがえる。疏水を散策される時、このような観点から見直されることもお勧めしたい。

（植爪 修）



第2トンネル西口



第3トンネル東口 扁額（へんがく）

大津歴博だより No.47  
平成14年7月10日

大津市歴史博物館  
〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100  
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>